

われらいま

■ 楽曲データ

歌詞：橋本峻一 作詞

楽曲：清水脩 作曲

発表：真宗教団連合 1970年

初演：「真宗讃歌中央発表会」 1970年8月3日 本願寺会館

初出：『親鸞聖人ご誕生800年・立教開宗750年記念讃歌 われらいま あの空見れば』 真宗教団連合 1970年

管理番号：M1646

■ 創作の経緯

親鸞聖人ご誕生800年・立教開宗750年を記念し、真宗教団連合が「真宗の歌」として制定。歌詞は公募による。「若人の歌」として制定の《あの空見れば》とともに発表された。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第4巻収録

底資料：版下原稿

比較資料：『佛教音楽』第11号 仏教音楽研究所 1985年

校訂の詳細：特になし

■ 解説

タイトルの「われらいま」には、日々つねに、真宗のみ教えとまっすぐに向かいあって生きていこうとする姿勢が窺われます。

思えば、親鸞聖人は和讃などで、「われら」という言葉をしばしば使っておられます。2、3例を挙げましょう。

- ①生死の苦海ほとりなし
ひさしくしづめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける（「高僧和讃」註釈版聖典579ページ）
- ②「十方衆生」といふは、十方のよろづの衆生なり、すなはちわれらなり。
（「尊号真像銘文」註釈版聖典657ページ）
- ③れふし・あき人、さまぎまのものはみな、いし・かはら・つぶてのごとく
なるわれらなり。（「唯信鈔文意」註釈版聖典708ページ）

このように親鸞聖人は、「我」でもなく「我々」でもなく、「われら」と表現されています。またある時は、「御同朋・御同行」と、念仏のみ教えを聞く人だけではなく、広く同じ時代、同じ社会を生きるすべての人間に、如来の本願が至り届いていることを明らかにしてくださっているのです。

◆詞について

詞は3連からなり、いずれも「われらいま」と歌い出されます。信心の道、念仏の道、報恩の道（といっても別々の道ではなく、みな同じ浄土真宗念仏の大道）を歩み、人の世をたくましく生きていこうと呼びかけています。

作詞の橋本峻一には、この作品の他に、《めぐりあい》（仏教音楽研究所公募作品）という仏教讃歌があります。

◆曲について

作曲は、清水脩（1911～1986）。《恩徳讃》（新譜）の作曲者として知られる人物です。彼は、大阪・天王寺の真宗大谷派寺院に生まれ、父親は四天王寺舞楽の楽人だったことから、少年の頃は子どもの舞に親しんでいました。

大阪外国語学校（現・大阪大学外国語学部）ではフランス語を学ぶとともに、グリークラブに所属。卒業後は、東本願寺研究生として、東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）の選科で作曲を学びました。

《恩徳讃》をはじめとして、小品から規模の大きなものまで、さまざまな仏教讃歌を発表しており、仏教音楽の普及に果たした役割は言い尽くすことができません。

◆演奏のヒント

- ①中音域からはじまるので、歌いやすいのではないのでしょうか。6小節目「ド」は、低い音ですが押さえつけず、のびやかなよい響きで歌いましょう。
- ②9小節目からは、「シ♭」が連続します。あとの音ほどピッチが低くなりやすいので、気をつけましょう。
- ③12小節目は、「ド」→「ミ♭」と下がる音程を正確に。
- ④16小節目から再びクレッシェンド（だんだん強く）していき、17小節目4拍目から19小節目3拍目までは力強く歌いあげましょう。そして19小節目4拍目からは、少し音量を落として、直前の言葉を穏やかに反芻します。
- ⑤19・21小節目「ん」は、唇を閉じずに少し開いて、響かせましょう。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 59（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第186号収録）を加筆・修正のうえ、転載。